

福田はるか著『赤彦とアララギ』(鳥影社)を読む

福田はるか著

▼赤彦とアララギ

中原静子と大田書志子をめぐって
6・18刊 四六判六五八頁 本体二八〇〇円
鳥影社

確たる自分の世界を 持つている作家・福田はるか

亦彦の全体像を照らし出した類書のない評伝

勝又浩

野に遺賢ありというが、同人雑誌を長く読んで来てしばしばそういう思いに打たれた。そして、優れた書き手に出会ったときなどは、いまづ作家として通っている某々氏よりずっと良いではないかと、話がそんな方向に転ずることも珍しくなかった。その

人に雑誌の作家作品をもっと吸い上げて押し出しても行きたくないという念願だった。それから現在の鳥影社発行になるまで何軒もの書肆を移るなど幾度変遷はあるものの、幸いに読者、文壇の一部の理解、応援を得て細々ながら六六号の今にまで続けて、一般にも認知されるようになって来た。

た一人である。もう永いお付き合いになるが、そうしたなかで私が驚いたのは、書下ろしとして刊行された『田村俊子——谷中天王寺町の日々』(平成15年、図書新聞社)という彼女の仕事だった。田村俊子とは、小説家志望として幸田露伴に弟子入りしながら、そこには納まりきらぬで全く別のタイプの、当時としては大胆な口語体の小説でデビューすることになった明治の女性作家である。『あきらめ』(明治44年)

それで、いくらか我田引水になるのはお見逃しいただくとして、我々旧「文藝界」同人雑誌評の担当者四人は、右のような思いから雑誌「季刊文科」を創刊したのだった。

さて、福田はるかのごうした仕事ぶりを私に、雑誌「じくうち」に本書の第一稿である『武石村』、『白桃・緋桃——静子と書志子』の連載が現れたとき注目しないわけがない、というところはご理解いただけるであろう。同人雑誌評では、一度に大量の作品を読むゆえもあって、普通は連載ものは見送り、言及することもほとんどないのだが、このときはやはり例外で、連載中にも経過を楽しんではその度に何度か紹介したのである。

前書きが長くなったが、ここに紹介する福田はるかも、こうした背景のなかにある強力な書き手の一人なのだ。主に同人雑誌「じくうち」によって、ここが大事なところなのだが、書いたもの、発表された作品に大体外れが無い、安定した作風を見せている書き手である。言い換えると、確たる自分の世界を持つている作家である。我々が「季刊文科」を創刊したときも、それゆえ逸早く執筆をお願いし



も不倫や同性愛の噂もあったような、一筋縄ではいかない女性だ。こんな怪物、異風な女性の生の跡を追って、しかしそこで作者の筆は少しも偏りが無い。逸脱する女主人公を描きながらも、そこで気短に責めることも甘やかすこともなく、淡々と、だが愛情を持ってその女としての魅力を浮かび上がらせているのだ。

伝記としてはつとに瀬戸内晴美の『田村俊子』(昭和36年)があるが、これはいわば田村伝の大通りを闊歩したようなもの、それに対すれば福田はるかか田村伝は松魚との同棲時代を中心にした、いわば横道裏路地を丹念に調べ、細やかに描き上げた秀作である。

さて、福田はるかのごうした仕事ぶりを私に、雑誌「じくうち」に本書の第一稿である『武石村』、『白桃・緋桃——静子と書志子』の連載が現れたとき注目しないわけがない、というところはご理解いただけるであろう。同人雑誌評では、一度に大量の作品を読むゆえもあって、普通は連載ものは見送り、言及することもほとんどないのだが、このときはやはり例外で、連載中にも経過を楽しんではその度に何度か紹介したのである。

と、彼をめぐる女性たち、主に三人の女性を中心にした評伝である。なかでは、新卒の新任女教師として赴任した小学校の校長先生が赤彦だったという出会い、それから彼によって短歌への目が開かれ、以来赤彦を慈父のように慕い、尊敬し、結局は陰の愛人のような関係を秘めつくした中原静子、彼女についての追跡や発掘、また歌をはじめ諸資料への柔軟に行き届いた読み込みや人間への理解がみごとである。

歌人赤彦についての研究や批評はすいぶんあるが、中原静子はほとんど忘れられた、あるいは故意に無視された歌人だが、そうした女性を発掘し、その存在を通して赤彦の全体像を照らし出した評伝は類書のない仕事だと言ってもいいであろう。いま改めて再読してみてその感を強くしている。

本書について、実は私は巻末に「寄せ書き」として感想を書いている。従って客観的な書評のためには適任ではないのだが、そこを承知のうえでの本紙編集長からの要請があり、あえて著者福田はるかさんについて贅言を費やした次第。お許し願いたい。

(文芸評論家)

内容は、要するに島本赤彦